

筑波大学附属図書館における学問領域別に見る利用者ニーズ

西浦ミナ子（筑波大学大学院博士前期課程）mnisiura@slis.tsukuba.ac.jp

1. 研究の背景と目的

大学図書館は「学生が自ら行う調査、学習のための基礎資料の整備を含む学習環境を充実」¹⁾させることにより、大学教育に貢献することが期待されている。そのためには、図書館がサービスとして提供する「学習環境」やその他の学習・研究支援を含むサービスが、教育の質の向上・改善に役立ち、目的意識や学習意欲の高い学生を育てることに寄与していく必要がある。

しかし、現状では十分な対策が行われているとは言いがたい。その理由の一つとして、大学図書館が学生利用者をマスとして捉える傾向にあり、それぞれの学習行動に留意したサービスがあまり見られないことが挙げられる²⁾。

本研究では、学生の属する学問領域が学生の学習、調査・研究行動に何らかの影響を与える、という立場³⁾に立ち、学問領域別にその傾向や特徴の分析を試みる。その結果をもとに、今後、筑波大学附属図書館が大学教育に貢献するために取り組むべき方策について検討することを目的とする。

2. 方法

2.1 調査方法

2011年6月、筑波大学附属図書館をフィールドとし、質問紙調査とウェブ調査を実施した。設問内容、構成は同一である。実施日時、回答状況などを以下に示す。

(a) 質問紙配布

配布日時：2011年6月17日(9:40～17:00)

配布場所：筑波大学中央図書館入口前

配布対象者：筑波大学中央図書館入館者

(当日17時までの入館者数約1800人)

配布部数：908部

回答期限：2011年6月30日

回収部数：272部(回収率29.9%)

内訳：学群生180、大学院生66、その他24、無効回答2

(b) ウェブ調査

実施期間：2011年6月17日～30日

対象者：筑波大学附属図書館のメールサービス登録者の内「図書館からのお知らせを受け取る」にチェックし、且つ「図書館からアンケートのメールが届いてもよい」という設定にしている利用者

通知方法：筑波大学附属図書館からアンケート協力依頼の通知メールを一斉送信)

回答件数：102件

内訳：学群生30、大学院生61、その他11

2.2 調査対象

質問紙とウェブアンケートの回答を併せた回答数374件の内、本質問紙調査の調査対象は、学群生210名、大学院生127名である。結果を分析する際には、質問紙調査、ウェブアンケート、それぞれの特質(調査対象の母数や調査手段の相違点など)を考慮しつつ、両者のデータを統合した分析を試みる。

2.3 調査項目

調査項目は、学生の身分や学問領域と、知的活動のライフサイクルとの関係や図書館利用との関係、さらに図書館の学習・研究支援サービスの代表であるレファレンスサービスとの関係などを把握することを念頭に設計した。調査票は以下の通り15の設問からなり、大きく5つのセクションに分かれる。

- (1) フェイスシート(身分、所属など)：設問1～5
- (2) 学習、調査・研究スタイル(場所、時間帯、相談相手など)：設問6～9
- (3) 図書館利用(来館頻度、目的、滞在時間など)：設問10～12
- (4) レファレンスサービス(認知度、利用経験、目的など)：設問13～14
- (5) 自由記述(希望するサービスなど)：設問15

本質問紙調査では、「学習」と「調査・研究」に関しては、調査票上で次のように定義し、回答者はこの定義を読んだ上で回答していることを前提とする。

「学習」…「テキストや配布資料、教養書などで勉強し、必要な知識や技術を身につけること」

「調査・研究」…「テーマや課題を自ら設定し、それについて情報を集め、調べたり、実験やフィールドワークなどを行うことで、新たな知見を生み出すこと」

2.4 学群、研究科の学問領域分け

筑波大学における学群・学類、研究科・専攻は、一般的な学問領域を反映するものではない。そこで、科学研究費補助金の「系・分野・分科・細目表」⁴⁾を参考に、25の学群・学類と68の研究科・専攻を、「人文学」、「社会科学」、「自然科学、工学、医学(以下STMと呼ぶ)」、「総合領域(情報学、スポーツ科学、その他)」の4領域へ分類を試みた。本研究で学問領域と言う場合、この4領域を指す。

領域ごとの学群生210名の内訳は、人文学51名、社会科学34名、STM88名、総合領域37名である。大学院生では、専攻の記述がなく分類できなかったケースが1件あったため、分類可能件数は127件中126件となった。内訳は、人文学19名、社会科学44名、STM36名、総合領域27名である。

3. 調査結果

3.1 筑波大学の図書館利用率

全体的に学習の場としての筑波大学附属図書館は、学問領域を問わず、60~80%の割合でよく利用されるが、調査・研究の場としては、人文学(48名/96%)、社会科学(49名/80%)の学生の方が、STM(34名/50%)や総合領域(22名/52%)と比べて利用率が高い。

また、人文学や社会科学の学群生は、「テーマや課題を自ら設定」する知的活動、つまり「調査・研究」活動を始める時期が、STMや総合領域に比べて早い。表1に示したように、STMと総合領域では4年生になって割合が急増する。さらに、表2に示したように、調査・研究場所として図書館を利用する割合についても、人文学、社会科学では全学年で100%と高く、STMや総合領域との差が顕著に見られる。

一方、STMや総合領域では、大学院生も

学群生も図書館利用率は低く、逆に「研究室」の利用率が高くなる(表3)。しかし、16時以降になると、STMと総合領域の学群生、およびSTMの大学院生の図書館利用は増加する傾向にある(図1, 2)。

表1. 学群生：調査・研究の有無

領域	学年	調査・研究の有無			最近有意確率(四捨)
		有	無	合計	
人文学	1-3年	18	16	34	0.003 **
	4年以上	53%	47%	100%	
	合計	71%	63%	134	
社会科学	1-3年	12	8	20	0.003 **
	4年以上	60%	40%	100%	
	合計	72%	48%	120	
STM	1-3年	47	14	61	0.000 **
	4年以上	77%	22%	100%	
	合計	82%	36%	118	
総合領域	1-3年	19	3	22	0.000 **
	4年以上	86%	14%	100%	
	合計	95%	17%	112	
合計	1-3年	98	41	137	0.000 **
	4年以上	136%	87%	223	
	合計	234%	128%	362	

**は1%水準、*は5%水準で有意(以下同様)

表2. 学群生：調査・研究目的の図書館利用

分野	学年	筑波大学の図書館		合計	最近有意確率(四捨)
		よく利用する	よく利用しない		
人文学	1-3年	16	0	16	-
	4年以上	100.00%	0%	100.00%	
	合計	16	0	16	
社会科学	1-3年	8	0	8	-
	4年以上	100.00%	0%	100.00%	
	合計	8	0	8	
STM分野	1-3年	8	5	13	0.508
	4年以上	81.50%	38.50%	100.00%	
	合計	11	11	22	
総合領域	1-3年	1	2	3	0.591
	4年以上	50.00%	50.00%	100.00%	
	合計	9	4	13	
合計	1-3年	33	8	39	0.253
	4年以上	69.20%	30.80%	100.00%	
	合計	84.60%	15.40%	100.00%	

表3. 調査・研究場所としての研究室利用率(学問領域別)

身分	領域	研究室		合計	最近有意確率(四捨)
		利用する	利用しない		
大学院生	人文学	9	10	19	0.001 **
	社会科学	47%	53%	100%	
	STM	25	16	41	
	総合領域	61%	39%	100%	
	合計	31	2	33	
学群生	人文学	94%	6%	100%	0.000 **
	社会科学	22	5	27	
	STM	82%	19%	100%	
	総合領域	3	28	31	
	合計	10%	90%	100%	
合計	人文学	1	20	21	0.000 **
	社会科学	5%	95%	100%	
	STM	22	13	35	
	総合領域	63%	37%	100%	
	合計	10	5	15	

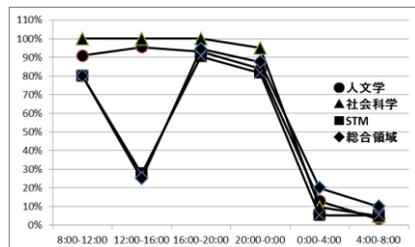


図1. 学群生：図書館利用時間帯

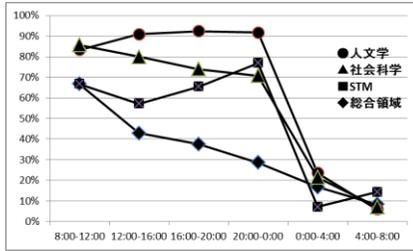


図 2. 大学院生：図書館利用時間帯

3.2 レファレンスサービスについて

3.2.1 認知度と利用率

レファレンスサービスの認知度と、知っていると回答した学生の利用率を表 4、5 に示す。人文学、社会科学の学生は認知度、利用率共に 70%前後と高く、STM は認知度も利用率も約 40%と低いことが分かる。総合領域に関しては認知度は 74%と高いが、利用率は 53%と低い。

表 4. レファレンス認知度(領域別)

領域	レファレンスの認知度		合計	漸近有意確率(両側)
	知っていた	知らなかった		
人文学	50	18	68	0.000 **
	74%	27%	100%	
社会科学	52	25	77	
	68%	33%	100%	
STM	30	71	121	
	41%	59%	100%	
総合領域	46	16	62	
	74%	26%	100%	
合計	198	130	328	
	60%	40%	100%	

(337 件中無効回答 8 件 + 領域不明 1 件)

表 5. レファレンス利用経験(領域別)

領域	レファレンス利用経験		合計	漸近有意確率(両側)
	はい	いいえ		
人文学	32	18	50	0.017 *
	64%	36%	100%	
社会科学	36	16	52	
	69%	31%	100%	
STM	20	30	50	
	40%	60%	100%	
総合領域	25	21	46	
	54%	46%	100%	
合計	113	85	198	
	57%	43%	100%	

3.2.2 利用目的

利用経験のある学生の利用目的は、人文学と社会科学では「特定の研究テーマに関する資料を求める(文献複写含む)」という回答が 60-70%と多く見られた(表 6)。一方、STM では「本や雑誌の所在を聞く」という利用目的が 80%と高い割合を占めている。総合領域も、人文学、社会科学と比較すると若干高い割合でこの目的を選択している(表 7)。

表 6. レファレンス利用目的：特定の研究テーマに関する資料を求める(領域別)

領域	特定の研究テーマに関する資料を求める(文献複写依頼も含む)		合計	漸近有意確率(両側)
	はい	いいえ		
人文学	23	9	32	0.001 **
	72%	28%	100%	
社会科学	22	13	35	
	63%	37%	100%	
STM	4	16	20	
	20%	80%	100%	
総合領域	11	14	25	
	44%	56%	100%	
合計	60	52	112	
	54%	46%	100%	

表 7. レファレンス利用目的：本や雑誌の所在を聞く(領域ごと)

領域	探している本や雑誌の所在を聞く		合計	漸近有意確率(両側)
	はい	いいえ		
人文学	15	17	32	0.112
	47%	53%	100%	
社会科学	19	15	34	
	56%	44%	100%	
STM	16	4	20	
	80%	20%	100%	
総合領域	16	9	25	
	64%	36%	100%	
合計	66	45	111	
	60%	41%	100%	

3.2.3 利用手段

利用手段としては「図書館内のレファレンスカウンター」が 90%前後の高い割合で利用される一方、メールやウェブフォームでの利用は、学群生では 16%しかなく、大学院生でも 49%という低い利用率であった。メールやウェブサイトからレファレンスを利用しない理由としては、「特に必要がないから」(学群生、大学院生ともに 40%)と、「メールやウェブで受け付けていることを知らなかったから」(学群生 45%、大学院生 33%)の選択率が高かった。

また、回答者全員に可能であれば利用したい手段を尋ねたところ、人文学では学群生が約 70%、大学院生は約 90%という高い割合で、「図書館内のレファレンスカウンターを訪れる」を選択した。社会科学と総合領域の大学院生も、60%以上の割合がある。一方、人文学以外の学群生と、STM の大学院生でレファレンスカウンターを好む学生は 50%に満たない。ここでは学問領域の他に、身分や年齢の特徴が現われていると言える(表 8)。

表 8. レファレンスの手段として図書館内レファレンスカウンターを希望する割合

身分	領域	図書館内のレファレンスカウンターを訪れる		合計	最近有意確率 (両側)
		はい	いいえ		
大学院生	人文学	16	2	18	0.007 **
		89%	11%	100%	
	社会科学	33	10	43	
		77%	23%	100%	
	STM分野	16	18	34	
		47%	53%	100%	
	総合領域	17	10	27	
	63%	37%	100%		
	合計	82	40	122	
		67%	33%	100%	
学群生	人文学	34	13	47	0.000 **
		72%	28%	100%	
	社会科学	14	17	31	
		45%	55%	100%	
	STM分野	41	44	85	
		48%	52%	100%	
	総合領域	9	28	37	
	24%	76%	100%		
	合計	98	102	200	
		49%	51%	100%	

「メールかウェブフォーム」については、学問領域や身分の回答率に大きな偏りはなく、大体 50%~70%の幅でレファレンスの手段として好まれる。総合領域の学生に特徴的だったのは、大学院生は「図書館内のカウンター」と「メールかウェブフォーム」を同じ割合で好むが、学群生は、「図書館カウンター」よりも「Twitter」を好むという点である。

4. 結論

調査結果から、筑波大学附属図書館の学生利用者が、知的活動のライフサイクルや図書館利用全般、また学習・研究支援サービスの代表であるレファレンスサービスとの関わりにおいて、学問領域別の特徴を持つことが確認できた。それを踏まえると、図書館が「目的意識や学習意欲の高い学生を育てることに寄与」するための方策として以下の点が指摘できる。

- 1) 人文学、社会科学で図書館の開館から閉館まで高い図書館利用率が保たれること、また STM や総合領域では 16 時以降に利用率が上昇することを考慮すると、レファレンスサービスや複写依頼サービスの現在の提供時間(9:00~17:00)は、学生の図書館内での知的活動の時間帯とミスマッチを起している。サービス提供時間を改善することで、より多くの学生が、より効率的で効果的な知的活動を実現できる可能性がある。
- 2) 人文学や社会科学の学生は、学群 1 年生から図書館で調査・研究を行う割合が高

いことから、早い段階で特定の主題に関する文献の調査方法やレポートの基本的な書き方などをサポートするサービスが有益だと考えられる。

- 3) 研究室を主な調査・研究場所とする STM の学生は、図書館を主に学習の場として利用する傾向が見られる。そこで、研究室で生んだ成果を図書館に持ち寄り、他の学生と交流することで新たな知見が生まれるような場を用意するなど、研究室とは異なるクリエイティブ空間の提供が考えられる。
- 4) 総合領域の学生は、全体的に図書館に足を運ばない傾向が見られたが、Twitter を用いたレファレンスサービスに関心が高かったため、新しいメディアを用いた学習・研究支援サービスを開拓することも一つの可能性として考えられる。

本研究では、学問領域別に学生利用者の傾向を捉えることが、大学教育に貢献する図書館サービス再構築の一助となる可能性を示した。ここで提案した方策の妥当性については、追加調査を行うことでさらに検討していきたい。

引用文献

- 1) 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会. 大学図書館の整備について(審議のまとめ): 変革する大学にあって求められる大学図書館像. 文部科学省, 2010. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm, (参照 2011-02-27).
- 2) 上岡真紀子. 慶應義塾大学における利用者調査の事例(<特集>利用者調査). 情報の科学と技術. 2008, 58(6), p. 278-284.
- 3) 青木久美子. 学習スタイルの概念と理論: 欧米の研究から学ぶ. メディア教育研究. 2005, 2(1), p. 197-212.
- 4) “系・分野・分科・細目表”. 科学研究費助成事業 2011(平成 23 年): 新たな知の創造: 世界をリードする知的資産の形成と継承のために. 文部科学省. 2011, p. 32-33. http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/24_pamph/data/pamph2011_kaitei.pdf, (参照 2011-09-20).